

短期海外留学の教育効果に関する質的研究

—— 異文化体験の学習過程を示す記述を中心として ——

渡邊尚孝¹・久保田真吾²・倉増泰弘³

要 旨

本研究は、海外留学の効果に関する先行研究を踏まえ、1ヶ月間のフィリピン短期海外留学を経験した学生の体験レポート（149名分）の中から、異文化体験の学習過程を示す記述を中心にテキスト分析を行うものである。特に短期留学プログラムの意義や効果を把握し、今後のプログラム更新に向けた示唆を得ることを目的とする。方法としては、KHcoderによる計量テキスト分析を用いた。現地における語学研修以外の活動に関する記述内容を検討し、「生活環境に関すること」「対人関係に関すること」「文化に関すること」「自分自身に関すること」「ボランティアに関すること」の5つのコードに分類して解析した。その結果、90%以上の学生が現地の生活環境や対人接触の中で自国あるいは自分自身を振り返り、帰国後の生活に対する意識の変化を感じるなど、貴重な体験をしていることが確認できた。特にサブプログラムにおけるボランティア体験はそのきっかけとなっていることが認められ、生活環境の違いや子どもたちとの関わりは強いインパクトを持つと考えられた。

キーワード：短期海外留学・異文化体験・学習の過程・計量テキスト分析

はじめに

「教育は旅に始まり、旅に終わる」とも言われる。17世紀末、イギリスの哲学者ジョン・ロックは「教育に関する考察」という著書の中で教育における旅の効果を論じ、18世紀以降のヨーロッパでは、異国への旅を通して異文化に触れ教養を高める「グランドツアー」が、貴族階級の若者たちへの教育の一つと見なされた。幕末の日本では、長州藩や薩摩藩が海軍力強化の必要性を早くから認識し、海外渡航禁制下であることを知りつつも若者を先進国へ送り出した。明治期以降は国策として選抜した学生を欧米諸国へ送り出すようになり、先進国の知恵や技術を学び、自国の社会経済発展に貢献することが求められるなど、海外留学は多様な意義を持ちながら今日に至っている。

1 梅光学院大学子ども学部 n.watanabe@baiko.ac.jp

2 梅光学院大学文学部 kubotas@baiko.ac.jp

3 梅光学院大学文学部 kura@baiko.ac.jp

高度経済成長を経た後、日本と欧米諸国の経済的及び技術的格差は少なくなり、ICT技術の進歩によって地理的・時間的格差も縮まってきた。近年は、海外留学することでしか得られなかった知識・技能・情報は、国内にいても入手することが可能となり、外国語能力向上の機会も十分に得られるのが現状である。そのためか、経済成長の伸びが停滞する中で海外留学する日本人学生数は減少した。文部科学省統計(2017)によると日本人の海外留学生は2004年の82945人をピークに減少へ転じ、2014年度は55197人となり、日本の若者は「内向き志向」とであると揶揄されている。

「産学連携によるグローバル人材育成推進会議」による「産官学によるグローバル人材の育成のための戦略」(2011)では、「日本人の海外留学の拡大を産学の協力を得て推進する」と掲げ、その戦略的ビジョンを「大学の教育力を磨きつつ世界展開力を強化する」「世界的な学習フィールドで日本人学生を育てる」「日本の高等教育を世界に発信する」「グローバル人材育成に合った社会環境に変革する」と基本方針をまとめた。同会議は、具体的方策の中で大学の役割に関する期待を、(1)「国際的な通用性を確保し、魅力ある教育を提供する」(2)「大学自体がグローバル化するために」(3)「日本人学生の海外留学を後押しする」(4)「優れた外国人留学生を獲得する」(5)「他国の大学づくりを支援する」の項目でとりまとめ、産学官の連携による高等教育、特に大学の学部教育に焦点を当てたグローバル人材育成について議論を重ねている。我が国の大学進学率が5割を越えた現在、人材育成に係る高等教育の役割はますます大きくなった。日本人大学生を海外へ送り出すだけでなく、海外からの留学生受け入れ増加を含む国内の高等教育のグローバル化も必須である。しかしながら、日本の大学の序列構造の中、それぞれの大学における取り組みは異なっている。地域性や各大学の建学精神に根ざした取り組みを実践分析してゆくことが肝要であろう。

本研究では、大学等で近年実施されている短期の語学留学を含む海外研修について、学生の学習過程を示す報告レポート記述から異文化体験の意義と効果を見いだすことを目的としている。まず海外留学の近年の動向と様々な形態、および留学効果に関する先行研究を概観する。その後、地方の私立大学において短期海外語学留学を体験した学生たちの報告レポートのテキスト分析と先行研究を比較しつつ、異文化体験を通じた学びの質を明らかにすることを試みる。

海外留学の動向

文部科学省では「トビタテ!留学JAPAN」(2013年10月)により、日本人学生の海外留学者数を社会総がかりで取り組み、若者が多様な価値観や考え方に触れ、グローバル感覚を養うことを期待している。「留学白書」(2016)によると、日本人の海外留学目的の第1位は「語学習得」が94.9%で、以下に「視野を広げたい」70.5%、「コミュニケーション能力をつけたい」49.7%などが続く。学生にとって初めての海外体験である場合は、自らの行動様式や自文化を再発見したり、情報発信の大切さに気づいたりするなど、価値体系の見直しやアイデンティティの再構築を促す可能性を含んでいる。

さて、日本と主要国との取り決めにより、3ヶ月未満の観光・訪問の場合はビザを必要としない。そのため、文部科学省と国土交通省では、3ヶ月未満の海外での勉強を「研修」とし、3ヶ月以上にわたる勉強のための渡航を「留学」と定義を区別している。また、現在公表されている日本人の海外留学生数に関する統計は大きく分けて3種類ある。文部科学省による「日本人の海外留学者数」と独立行政法人日本学生支援機構（以下「JASSO」とする）による「協定等に基づく日本人学生留学状況調査」、そして民間海外留学事業者40社を統括するJAOS海外留学協議会（以下「JAOS」とする）の調査である。文部科学省が公表する「日本人留学生」の統計はOECD、ユネスコ、各国統計機関等の統計を集約したものと、JASSOによるものを併せて掲載する形となっており、「留学」の定義には若干の違いがある。本研究では教育機関における3ヶ月未満の短期海外研修プログラムも含め全て「留学」と定義して扱うこととする。

Figure 1の通り、それぞれの機関が把握する海外留学学生の形態やその数は異なる。先に触れた文部科学省の公表する「日本人の海外留学者数」統計はメディアにも取り上げられ易いデータであり、2014年度の55197人には語学留学が含まれていない。全体として減少推移してきたため、これにより「留学生減少」のイメージは強いものとなっているが、実際はそうとも言えない。JASSOの調査「協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果」2009年版と2015年版を比較すると、「協定等に基づかない日本人留学状況（在籍大学等把握分）」（参考資料扱い）を含めた海外留学生の全体数は、2009年の36302名から2015年の114457名へ漸増している。

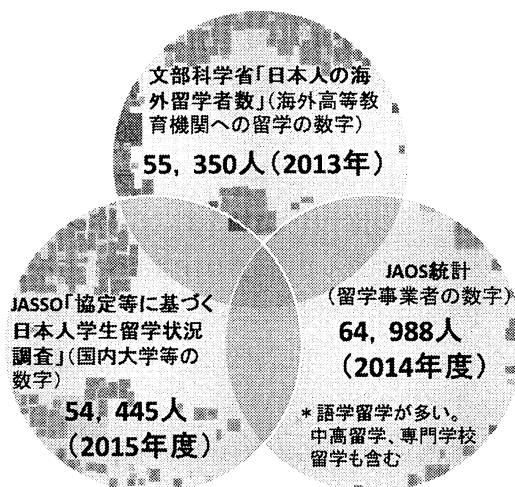


Figure 1. 各機関の把握する日本人留学生数の推計⁴

JAOS海外留学協議会理事の星野（2017）によると、多くの民間海外留学事業者が取り扱うのは後者の参考資料「協定等に基づかない日本人留学状況（在籍大学等把握分）」に該当するという。この参考資料2009年版と2015年版を比較すると、12314名から30001名へと3倍近く伸びている。この数値の増加が著しくかつ低年齢化していることに着目し、JAOS（2017）では民間海外留学事業者40社を対象に中高生や社会人を含めた調査を行った。2016年1年間の海外留学生79123

Table 1.
2016年1年間の海外留学生 (JAOS 調査)⁵

留学期間	語学留学 3ヶ月未満	語学留学 3ヶ月以上	専門学校・各種 学校等	大学学部課程・学位目的 以外(休学留学等)	大学学部課程・学位 取得目的	大学院課程・学位目的 以外(休学留学・研究 目的等)	大学院課程・学位 取得目的	中高校留 学交換と私 塾(語学研 修のみは含 まない)	その他(ボラ ンティア・イン ターンシップ・ 語学なしワー キングホリ デー)	合計
アメリカ	8862	2539	318	544	680	26	144	4998	913	19024
オーストラリア	10353	1412	126	133	534	25	88	3662	1078	17411
カナダ	7191	1980	36	75	154	0	1	2455	302	12194
イギリス	3877	817	62	116	79	14	16	1528	52	6561
フィリピン	5254	638	2	0	0	0	0	34	310	6238
ニュージーランド	2014	549	51	47	159	17	4	2405	338	5584
その他	1094	52	9	3	89	1	19	22	766	2055
中国	1177	577	0	9	21	1	1	8	24	1818
韓国	1054	510	0	25	24	0	0	9	81	1703
フランス	338	147	821	17	5	0	4	6	36	1374
フィジー	913	440	0	0	0	0	0	0	0	1353
シンガポール	642	23	0	15	12	0	4	54	294	1044
台湾	442	336	0	46	6	0	0	9	154	993
マルタ	737	52	0	0	0	0	0	0	1	790
アイルランド	423	100	1	1	1	0	0	8	15	549
ドイツ	254	50	77	14	5	0	1	2	29	432
総計	44625	10222	1503	1045	1769	84	282	15200	4393	79123

人の取り扱いについて把握したものが Table 1. である。

それによると、目的別では「3ヶ月未満の語学留学」が全体の過半数を占める。ボランティア・インターンシップ・語学なしワーキングホリデー等を加えると、全体の6割(49018人, Figure 2. 参照)に民間海外留学事業者が関わっていることになる。国別ではアメリカ・オーストラリア・カナダ・イギリスの上位4カ国で全留学生の70%を占めるが、2015年のJAOS調査では第6位だったフィリピンへの留学生数が、2017年調査ではニュージーランドを抑えて第5位に浮上している (Figure 3. 参照)。欧米先進国への留学は引き続き多いが、アジア圏への留学が17%強となったことや中高生の留学など低年齢化が進んでいる点は注目すべきであろう。各団体が把握する留学生数は、留学の定義が多様であるため推定するしかないが、星野 (2017) はJAOS調査 (2017) 報告書の中でその全体像を約20万人と予想し、「2020年の大学入試改革を見据え、今後は小学生の留学も増えていくと思われる」と推定している。

このように、様々な定義や形態により海外の教育機関に向いていることを留学と捉えれば、相当数の日本人が海外で学んでいることがわかる。つまり、学位取得というよりは、海外の生活や文化を実体験することを目的とした留学の方が多数を占めるようになったと言える。

一方、日本の経済成長スピードが停滞する中、年単位の海外留学を実践する時間的・経済的余裕がないと感じる学生が短期留学を選択するようになったという見方や、高等教育のグローバル化や学校の留学制度を検討する際の障壁などが、学生の留学動向に影響を及ぼしているという見方もある。留学白書 (2017) を公表した株式会社留学ジャーナルは、「留学意識調査アンケート結果にみる傾向」として次のような項目を挙げている。大学生の所属校の留学制度を検討する上で障壁となることは「語学力が基準に満たない」が44.3%でトップ、「行きたい提携校がない」

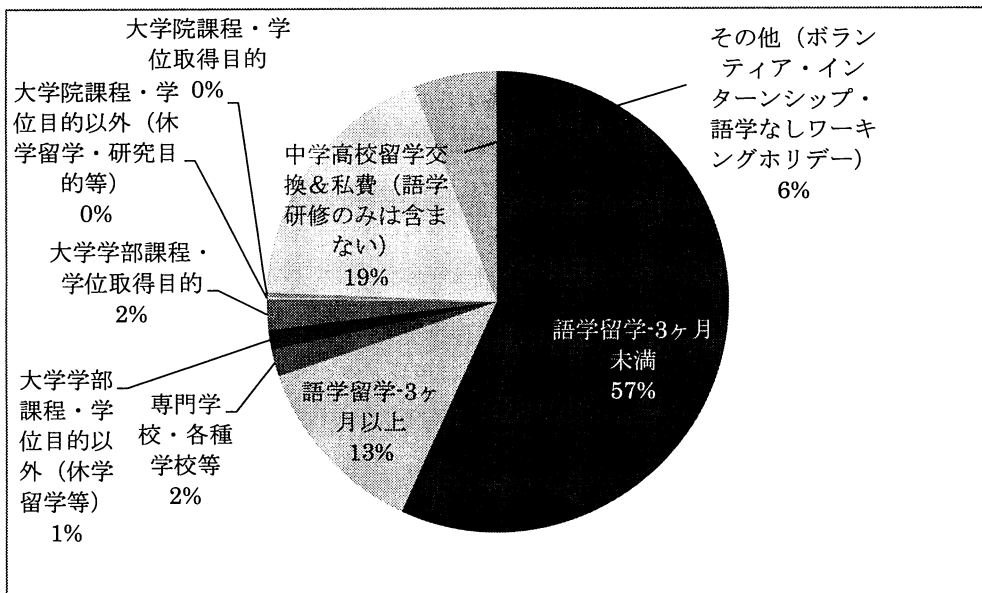


Figure 2. 留学目的別データ⁶

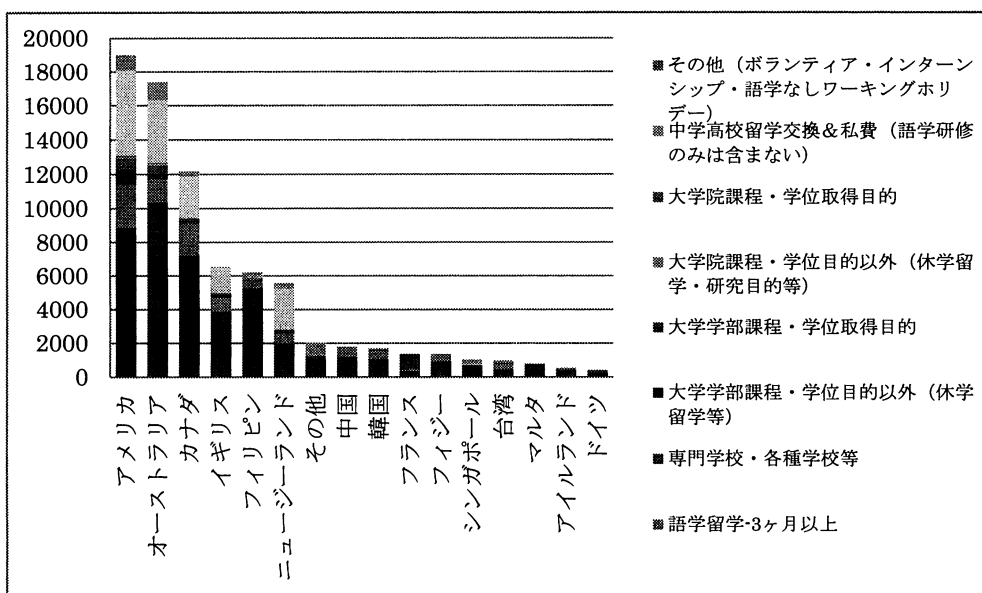


Figure 3. 国別留学者数と目的内訳⁷

が 28.1%、「留学する時期が合わない」が 27.3%。国内の就職状況の影響力は弱まった感があるが、それへの対応策として「留学時期を早める」の 9.3%が 2016 年比で 5.7 ポイント増、「留学期間を短くする」の 5.8%が 2016 年比で 2.2 ポイント増などの動きがある。同団体はこれに着目し、高校時代や大学 1 年次に早めの留学を経験し、自分の語学力や経験に応じてステップアップするための留学や、就職のためではなく、グローバル化を背景に将来を見据えた留学を求める大学生

が増えているのではないかと考察している。鈴木（2017）は大学生の留学を困難にする要因として3つ挙げている。2大要因は留学費用（経済的問題）と英語力（語学力不足）であり、第3の要因として多くの学生にとっては日本企業に就職するのが当然という意識があり、そのために新卒で就職することが有利なため、「正規留学」ではなく「語学留学」を選ぶということである。

浅間（2000）は、現代の留学を「学び志向の留学」と「外国志向の留学」の2つに分けて捉えた。つまり、自分が生活する土地では学びたい事柄を学べない状況であるため、やむを得ず海外へ行くといったパターンと、自己変貌や自己成長を目的としたパターンに大きく分けている。加えて、これまでの海外留学に関する一般的固定観念、(1) 海外留学は欧米先進国へ行くべきである (2) 海外留学は若い時に行くべきである (3) 海外留学は単身でゆくべきである について、自身の留学経験を踏まえ (2) (3) を否定はしないものの、(1) については「留学の意味は決して先進国への留学だけにあるのではない」と述べている。また、現地での休憩時間や放課後に日本人同士で日本語を使用してしまい、必ずしも語学力が向上できないケースが多く（井上，1994）、大学等の教育機関で海外に大人数を送り出す場合の問題点もある。語学力向上を目指すために留学するのか、海外文化体験など語学以外の目的で留学するのか、バランスの良い目的意識を持つことが大切であろう。留学の意義はどのようなものなのか。それは形態によって異なるのか。また、社会情勢に伴い変わってきているのであろうか。近年の海外留学状況を踏まえ、次章では短期留学の効果に関する先行研究を概観する。

留学効果に関する先行研究と人材育成

1. 語学力向上の効果巡って

留学による語学力向上の効果については、TOEICやTOEFLなどの語学力習熟度テストを留学の前後で実施した効果測定による研究や語学学習への動機づけ研究などが行われてきた。野中・田中・隅田（2001）は、3カ月および6カ月の短期語学留学プログラムに参加した学生6名について、留学前後に実施したPre-TOEFLのスコアを比較して研究を行い、「リスニングにおける効果については、個人差はあるものの優位性が認められ、一般的に海外研修で得られる最大の成果の一つとしてあげられる」と述べている。その後、野中・関（2016）が、同プログラム2004年度から2014年度までの総括を行い、語学研修・短期留学に参加した短大1年生125名の語学力伸長についてTOEIC IPのスコア比較により効果測定を行っている。その結果、いずれのプログラム参加者についても、リスニングパートにおいて統計的に有意な得点上昇が確認された一方で、リーディングパートの有意な得点上昇は6カ月留学派遣生のみでしか確認されなかった。特に語学留学では、TOEIC IPのスコアが450点以上の派遣生には、統計的に有意な得点変化が見られなかった。さらに、同スコアが320点以下の派遣生については、統計的に有意差ありとされるような得点上昇が、総合スコアとリスニング、リーディングパートのそれぞれで確認できたという。同じく、6カ月留学派遣生について、TOEIC IPのスコアが390点以上の派遣生と、340点以下の派遣生を比較した場合、いずれのグループにおいても、統計的に有意差ありとされ

るような得点上昇が、総合スコアとリスニングパート、リーディングパートのそれぞれで確認されている。しかし、これらの結果には、語学学校の授業に加えたホームステイ環境によるイメージ効果や、語学力習熟度テスト対策の効果が混在しているものと考えられる。

渡部（2009）は、大阪大学が2008年度に実施した約3週間の短期留学プログラムに関する実践報告を行った。この研修前後に実施したアンケート結果を基にプログラムの主観的・客観的評価を試み、リスニング力向上、および語学学習に関する動機づけの高まりに関する知見を得ている。さらに、自国や相手国の文化や歴史に関する事前講習の重要性、そして、研修の成果を実感しモチベーションを維持するためには研修後のフォローアップが重要であることにも触れている。予備知識があって初めて、交流する内容や質問事項が生まれ、「もっと理解したかった」「うまく説明できなかった」等の体験がその後の動機づけに影響してくるのであろうし、帰国後の生活姿勢によっては、語学力習熟度テストのスコアが低下することも十分にありうる。

また、学生による主観的な「自己向上感」を基にしたリスニング力向上や英語学習動機づけの高まりなどについての報告もある。倉増（2014）は、1ヶ月の短期語学留学プログラム（ボランティア活動を含む）に参加した学生50名のレポートの中に、「自信はないけど、恥はなくなった」「ミスをしてもいいと思えるようになった」「以前より英語を話すことに抵抗を感じなくなった」など、英語コミュニケーションにおける情意面の変化を確認している。

語学力向上にはワーキングメモリの個人差による限界も影響することは容易に想像がつく。また、留学の効果を高めるのに最低限必要な語学力の「閾値」の存在も概ね合意形成されている。その一方で、3週間から1ヶ月という短期留学の語学面向上については、研究者間で意見が分かれている（鈴木・林、2014）など課題は多い。また、留学期間中の経験に対する感受性などによって語学学習の動機づけに与える影響も様々（廣森、2017）という。いずれにしても、語学習得においてはリーディング力よりもリスニング力向上に一定の効果が認められることがほぼ定説となっている。では、語学力向上以外にはどのような効果が見込めるのか。次節では異文化体験の効果に関する先行研究に触れる。

2. 異文化体験の効果を巡って

前章で触れたように、浅間（2000）は現代の留学を「学び志向の留学」と「外国志向の留学」の2つに分けて捉えた。現在一般化している留学とは後者の「外国志向の留学」であり、自己変貌や自己成長を目的とした「通過儀礼」の構造を強く呈しているという。欧米先進国と日本の格差が縮まったことや、語学習得においては日本国内だけでも相当なレベルに達することが可能となったため、「学び志向の留学」は減り、自分を鍛錬するという積極的意味合いを持つ自己成長志向の留学が増えていると分析している。また、異文化ショック（所謂カルチャーショック）による自己成長の側面と関連させ、普遍的な「死と再生」の儀式として考えることが可能であるとした。「外国志向の留学」は、異文化の非日常的時間・空間の中でそれまでの常識や固定観念を崩され、自分をリセットして新しい自分へと再生する、という現代版の「通過儀礼」である。ICT技術の発展により、海外という遠く離れた非日常的世界であった場所は今や身近なもの

なってきた。その意味では、欧米先進国ではなく発展途上国への留学の方が自己鍛錬や自己成長に効果的であり、異文化ショックのポジティブな側面である「自分を成熟させる重要要因」を含んでいるのだという。

学生たちは他国の文化の中でストレスを感じ、改めて自国の文化を振り返り、アイデンティティを再構築してゆく。黒崎(2012)は短期海外留学プログラムに参加した学生のレポートを分析し、その教育効果と学生の異文化ショックの相関関係について論じた。「生を受けてから18年なり19年なりの間に構築してきたアイデンティティとの大きな違いを感じるのである。違いを感じるということは、母国である日本を考えるとということに他ならない」と述べ、また、2013年の論文では「自分の視野が広くなり新しい物の考え方が身に付き、外国から見た日本の魅力も知ることができた」「自分の町を、自分の国のことを何も知らないことがわかった」等、学生の記述を取り上げ、「日本を外から見ることによって、自分の将来や家族、そして母国である日本を考える時間を持つことは非常に大切なことである」「ものごとの本質を知るためには、実際の場面を体験することによって得た、心の動きを大切にしなければならない」と海外留学の意義と効果をまとめた。

異文化ショックのネガティブな影響を避けるため、黒崎(2012)は海外留学事前指導を重視し、「短期とはいえ、研修が身を結ぶかどうかは、この事前指導の内容如何にかかっているといっても過言ではない。」と述べた。一方で、浅間(2000)は、「(異文化ショックを回避するための)あまりに過剰な事前研修は留学の意義を損なう」と論じた。しかし、折衷的な見方をすれば、教育内容の工夫や環境設定によっては、海外へ行かなくても異文化の「通過儀礼」を経験することはある程度可能であるという解釈もできる。この点は今後の国内における授業内容やカリキュラムに工夫の余地を残す部分と言えるであろう。

大村(2013)は1ヶ月未満の海外短期語学留学参加学生279名の報告書の自由記述について、(1)学習の成果、(2)反省点、(3)次年度以降参加する学生へのアドバイス、という3点に焦点を当てたテキスト分析を行った。Text Mining Studio 4.0を用いて評判抽出を行った中で、好評であったのは、1.「人」2.「経験」3.「リスニング」4.「会話」5.「勉強」であり、「いろいろな人と触れ合いさまざまな経験ができた」ことが語学留学の満足度を高めた要因と考察した。また、反省事項について係り受け頻度分析を行なった所、1.「話す」2.「自分」3.「日本語」4.「日本人」5.「行く」であり、「日本人とよく一緒に行動したり日本語で話したりしてしまった」「語学力のなさを痛感した」という反省が多かったと報告している。総じて、「リスニング力の向上」と「帰国後の学習モチベーション」に加え、「異文化の体験学習」と「自立性の確立」を成果として挙げた。

異文化体験による価値観の拡がりや自立性確立などの人間的成長は、グローバル人材としての素養の一つと言える。次節ではどのような人材が社会から求められているのか、その一例に触れる。

3. グローバル人材育成を巡って

(社)日本経済団体連合会(以下「経団連」とする)は2010年9月から11月にかけて、「産業界の求める人材像と大学教育への期待に関するアンケート」を実施し、2011年1月に結果を公開した。これによると、「グローバルに活躍する日本人材に求められる素質、知識・能力」として最も指摘されたのは、「既成概念に捉われず、チャレンジ精神を持ち続ける」(419社/全回答数596社中)ことである。次いで「外国語によるコミュニケーション能力(語学力に加え、相手の意見を聞いた上で、自分の意見を論理的にわかりやすく説明する能力)」(368社/596社)、そして「海外との文化、価値観の差に興味・関心を持ち、柔軟に対応する」(312社/596社中)が上位であった。その他「現地に受け入れられる気配りと人間性」などの回答も取り上げられたことを受けて、経団連の井上(2012)は「キャリアに対する目標が明確になる大学時代までに、職業意識やグローバル化への理解や覚悟などが養われていることが理想」と主張している。グローバル人材か否かの評価と語学力習熟度テストのスコアは必ずしも一致するわけではない。産業界が求めるグローバル人材の育成というコンセプトの中では、語学一辺倒ではなく、日本人としてのアイデンティティや異文化を柔軟に受け入れた上での協調性を育てる教育を並行して行うことは非常に重要である。

調査

以上の議論を踏まえ、本研究では、夏季短期海外留学(ボランティア活動を含む)を経験した学生の体験レポートの内容を、異文化体験による学習の過程や情意面のインパクトに関して質的に検討する。語学力向上以外の教育効果を可視化し、産業界をはじめとした現代社会が求めるグローバル人材の育成へ向けた短期海外留学の意義を見いだすことを目的とする。この取り組みは、短期海外留学プログラムだけでなく、高等教育機関におけるカリキュラムをも充実させる一助となろう。

方法

2017年夏季から2015年夏季まで3年分を遡り、1ヶ月程度の短期海外語学留学に参加した学生の体験レポート(149名分)をテキスト分析する。学生の報告レポートは、(1)なぜこのプログラムに参加したのか(2)プログラムの中でどのような体験をして、それをどのように活かして行きたいか(3)次に参加する学生に向けたメッセージ、等について記述するよう求め提出させたものである。分析に当たってはKHcoderを利用し、語学学習に関するキーワードをできるだけ排する設定で、現地でのスタッフや人々との関わり、及びサブプログラムとして参加したボランティア活動の中で学生が感じた異文化のインパクトに関する表現を確認するために、単語頻度解析およびコード分類による集計を行った。

結果

1. 単語の頻度解析

1. 「留学」701回, 2. 「自分」698回, 3. 「日本」579回, 4. 「人」532回, 5. 「フィリピン」511回, 6. 「子」456回, 7. 「生活」386回, 8. 「感じる」321回, 9. 「学ぶ」314回, 10. 「経験」299回であった。「留学」が最も多いのは当然であるが, 多くの学生が, 日本とは異なる生活環境や現地の人々との触れあいの中で自国や自分自身を振り返り, 体験から学んでいることが読み取れる。特に, ボランティア活動の中で出会った子どもたちの暮らす環境と対比した笑顔や明るさなどに心を動かされたという記述が多かった。

2. 異文化体験のインパクトに関する分析

現地における語学研修以外の活動に関する記述語を検討し, Table 2. の通り「生活環境に関すること」「対人関係に関すること」「文化に関すること」「自分自身に関すること」「ボランティアに関すること」の5つのコードに分類した。

Table 2.
異文化体験のインパクトに関するコーディングルール

*生活環境に関すること 生活 or 日本 or 生活習慣 or トイレ or 不便 or 恵まれ or 幸せ or 衝撃 or 当たり前
*対人関係に関すること 意見 or 表情 or 考え方 or 人 or 元気 or 笑顔 or 恵まれ
*文化に関すること 文化 or 家族 or 笑顔 or 現地 or 体験 or 改めて or 気づく
*自分自身に関すること 自分 or 日本 or 恥 or 恵まれ or 感謝 or 実感 or 反省 or 変わ or 協力
*ボランティアに関すること ボランティア or 現実 or 子ども or 子供 or 子 or 家族 or 笑顔 or 恵まれ or 学校

各コードに含まれる単語の出現頻度を集計したところ, いずれのコードにおいても関連する記述は頻出しており (Table 3.), 象徴的な表現を Table 4. にまとめた。

Table 3.
異文化のインパクト (n=149)

コード名	出現回数	割合 (%)
*生活環境に関すること	149	100
*対人関係に関すること	146	97.99
*文化に関すること	136	91.28
*自分自身に関すること	149	100
*ボランティアに関すること	141	94.63

Table 4.
各コードにおける象徴的な表現

<p>*生活環境に関すること 「私は授業以外でも学んだことがある。自分の当たり前が通用しないことだ」 「日本ではほぼ見ることもない光景で、私にとって衝撃的だった。しかしその中に泣いている子どもはいなかった。現地に行って自分の目で見て知ることの差はとて大きいと感じました」 「改めて自分が恵まれた環境で生活できていることに感謝の気持ちを持つことができました」</p> <p>*対人関係に関すること 「貧しい中でも笑顔で振る舞っていると知り、本当に強く思いやりのある子たちだと感じました。それと同時に自分の愚かさや未熟さを痛感しました。自分よりも幼い子たちに教わりました」 「彼ら（ルームメイト）と一緒に過ごして学んだことは、相手を認めて受け入れれば、違う環境で育った違う価値観の人でもうまく関わっていけるということだ」</p> <p>*文化に関すること 「価値観が全く違いました。そう考えると日本は豊かな暮らしをしているなど改めて思いました」 「フィリピンでは、どんなことがあっても笑っていて、誰かが笑うと周りも笑顔になるという考え方が面白い。とても素敵なことだと感じました」</p> <p>*自分自身に関すること 「この経験を通して、自分の日頃の生活を振り返って反省すべき点を沢山見つけることができました」 「学校に行きたくても行けない子どもたちがたくさんいる状況に何もできない無力な自分がとても悔しかった」 「この1ヶ月セブ島で過ごした中で強く感じたことは、一つ一つの出会いに感謝すべきだということです」</p> <p>*ボランティアに関すること 「自分自身の価値観や気持ちを変えたのはボランティアやフィリピンの人々との交流だった」 「厳しい生活の中でもこんなに輝かしい笑顔があることは素晴らしいことだと思います。その笑顔を見て、私は将来このような世界で厳しい環境にいる子どもたちを助ける活動をしたいと思うようになりました。この気持ちはフライトアテンダントになりたいという気持ちよりも大きいです」 「置かれた環境に屈せずたくましく生きる姿に心を打たれました。自分も力強く生きないといけないと思いました」</p>
--

考察

過酷な環境の中で生活する現地の子どもたちの笑顔や、家族に対する強い思いなどに触れることで学生たちは驚き、自分自身を振り返り、自国での恵まれた環境に感謝の思いを抱くようになったとする記述が多く見られた。語学研修以外の生活体験やボランティア経験の中で、国内で出会う機会のない生活環境や現地の人々の生活姿勢などに、学生は強いインパクトを受けたようである。また、同じ日本人でも生活環境や育った家族文化は異なるため、留学中の集団生活における摩擦経験も同様に自分を振り返る機会となっている。浅間（2000）の述べた「外国志向の留学」における「通過儀礼」としての体験、そして大村（2013）や黒崎（2012, 2013）も主張した異文化体験による教育効果が同様に見いだされたと言える。このような学習過程は、帰国後の語学学習のモチベーションを高めるに留まらず、生活姿勢の改善や将来の自己指導能力にも影響を与えてゆく。

本研究の被検者である149名のプログラム参加者の9割以上が大学1年生であり、同留学が初めての海外渡航になるケースも少なくない。まして、その渡航先がフィリピンとなると異文化ショックも大きく、海外に対する嫌悪感や拒絶に近い態度を示す学生がごく少数ながら出ることもある。そのため、同プログラムでは、留学前講座として現地での生活での留意点やボランティア活動、危機管理に関する説明等は随時行っており、予備知識なしで現地に赴くことはない。ただ一方で、前述したような過剰な事前研修により留学の意義が失われるようになってはならない。

また、研修後のフォローアップの充実も必須である（渡部2009）。同プログラムは、留学後に

体験レポートと留学報告会でのプレゼンテーションを課す程度に留まっている。しかし、期間の長短に関わらず、留学はあくまで4年間の学びの一部であり、学生が卒業後に社会が求めるグローバルな人材に成長していくことが本来の意義である。今後、事前研修、現地研修、事後研修の流れが、カリキュラムの中により明確に位置づけられ、同プログラムの参加学生がより高次の学びができるよう、検討を重ねる必要があるだろう。

今後の課題

最後に、学生のレポートは、語学研修に関する詳細内容や異文化体験に関する内容が入り交じって記載されており、コーディングルールの条件設定には難渋した。本研究は短期留学レポートの内、異文化体験のインパクトに焦点を当てたテキスト解析のみであり、質問紙法を用いた量的分析は実施していない。また、参加者の帰国後の行動変化は追跡しておらず、学生から教員に対する報告という体裁もあるため、解析データの信頼性の問題も残る。KHcoderを用いた客観的分析ではあるものの、学生の文章構成力や筆者のテキストマイニング手法の未熟さにより、主観の入り混じる解釈となった可能性は否定できない。今後は量的分析による効果測定を含め、帰国後の行動変容について研究を行い、短期留学の効果検証を継続したいと考えている。

謝辞

本研究は梅光学院大学 2017 年度教育改革推進奨励研究費に基づくものである。研究を進めるにあたり、丁寧にご協力賜った先生方および温かくご支援頂いたすべての方々に感謝申し上げます。

注

- 4 JAOS 海外留学協議会 2017 ビジネスセミナー資料からのイメージ図 (同団体の許可を得て作成)
- 5 JAOS より許可を得て編集
- 6 JAOS より許可を得て編集
- 7 JAOS より許可を得て編集

引用・参考文献

- 浅間 正通 編著 (2000). 異文化理解の座標軸——概念的理解を超えて—— 日本図書センター
- 一般社団法人 JAOS 海外留学協議会 (2013). JAOS 認定留学カウンセラー資格取得準備キット Vol.1 株式会社アルク
- 一般社団法人日本経済団体連合会 (2011). 産業界の求める人材像と大学教育への期待に関するアンケート結果
<https://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2011/005/honbun.pdf> (2017年12月24日確認)
- 井上 雍雄 (1994). 教育交流論序説 玉川大学出版部
- 井上 洋 (2012). 企業の求める人材像と大学教育への期待 工学教育, 60(3), 4-8.
- 猪池 雅憲・金杉 高雄 (2015). グローバル研修の活性化に向けて——学士課程教育と倫理観の養成—— 太成学院大学紀要, 17, 11-19.
- 大村 吉弘 (2013). 海外短期語学研修報告書の分析——テキストマイニングを用いて—— 近畿大学教養・

- 外国語センター紀要（外国語編），3(2)，97-108.
- 株式会社留学ジャーナル（2016）. 留学白書 2016
<http://www.ryugaku.co.jp/spot/pdf/hakusyo2016.pdf>（2018年1月30日確認）
- 株式会社留学ジャーナル（2017）. 留学白書 2017
<http://www.ryugaku.co.jp/spot/pdf/hakusyo2017.pdf>（2018年1月30日確認）
- 倉増 泰弘（2014）. セブ島における語学留学プログラムの構築 梅光学院大学論集, 47, 43-58.
- 黒崎 真由美（2012）. 短期海外研修の教育的意義について 湘北紀要 33, 107-124.
- 黒崎 真由美（2013）. 海外留学の意義と効果——短期海外研修&3ヶ月留学—— ウェブマガジン「留学交流」29, 独立行政法人日本学生支援機構
- 小林 千穂（2017）. 短期留学の外国語学習モチベーションへの効果 天理大学年報 68,
- 産学連携によるグローバル人材育成推進会議（2011）. 産官学によるグローバル人材の育成のための戦略
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/06/01/1301460_1.pdf（2017年12月24日確認）
- 鈴木 理恵・林 千賀（2014）. 海外語学短期留学の効果——学生の言語的、情意的側面に見られる変化—— 関東甲信越英語教育学会誌 28(0), 83-96.
- 鈴木 穰（2017）. 『語学留学は日本独特の留学形態である』を考察する：若者を取り巻く状況と今後の変化 上武大学ビジネス情報学部紀要 16, 39-62.
- 独立行政法人日本学生支援機構（2011）. 協定等に基づく日本人学生留学状況 2009年度調査
http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/2010/_icsFiles/afieldfile/2016/01/28/short_term09.pdf（2017年12月30日確認）
- 独立行政法人日本学生支援機構（2017）. 協定等に基づく日本人学生留学状況 2015年度調査
http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/2016/_icsFiles/afieldfile/2017/03/27/short_term15.pdf（2017年12月23日確認）
- 野中 辰也・田中 ゆき子・隅田 朗彦（2001）. 短期語学留学プログラムの効果測定(1) 新潟青陵女子短期大学研究報告 31, 71-78.
- 野中 辰也（2008）. 海外語学研修の効果測定(2) 新潟青陵大学短期大学部研究報告 38, 43-49.
- 野中 辰也・関 久美子（2016）. 海外語学研修・短期語学留学による英語運用能力の変化 新潟青陵大学短期大学部研究報告 46, 89-97.
- 廣森 友人 監修（2017）. 何が海外留学を成功に導くのか？ ——留学の効果を最大化する3つのヒント—— デザインエッグ株式会社
- 星野 達彦（2017）. JAOS 海外留学協議会ビジネスセミナー資料（2017年10月2日大阪）
- 文部科学省（2013）. トビタテ！留学 JAPAN
<http://www.tobitate.mext.go.jp/program/index.html>（2017年12月30日確認）
- 文部科学省（2017）. 日本人の海外留学状況
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/_icsFiles/afieldfile/2017/12/27/1345878_02.pdf（2017年12月30日確認）
- 吉田 文（2014）. 「グローバル人材の育成」と日本の大学教育 教育学研究 81(2), 164-175.
- 渡部 留美（2009）. 短期海外研修のプログラム作りと課題：大阪大学グローニンゲン大学短期訪問プログラム実践報告 大阪大学留学生センター研究論集, 13, 75-82.